OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	エッセイ ： 国際協力における支援者と被支援者の関係性 ： 未来共生学が教えてくれた目に見えないもの
Author(s)	澤村, 信英
Citation	未来共生学. 2019, 6, p. 138-141
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72120
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エッセイ

国際協力における支援者と被支援者の関係性

未来共生学が教えてくれた目に見えないもの

澤村 信英
大阪大学大学院人間科学研究科教授
未来共生プログラム運営統括委員（財務・人事）

私はサブサハラ・アフリカの教育開発と国際協力を専門としている。未来共生プログラムに関わるまで、共生についてさほど考えたことはなかった。ただ、何か解決が難しい事柄に直面すると、「共生」という言葉に助けを求めていた気はする。アフリカの大多数の人びとは、経済的に厳しい生活を送っている。貧困の撲滅は最優先すべき国際開発目標であり、そのためにさまざまな国際協力が行われてきた。絶対的に恵まれた者が貧困層にある人びとといかなる関係を構築できるのかは、言うまでもなく難問である。

もう10年以上前になるが、2006年に『ケニア教育開発合宿―共生的フィールドワークを求めて―』と題する報告書を作成した。これは、当時の教育開発に関わる研究者と実践者8人が集まり、ケニアで合宿形式のフィールド調査をした成果をまとめたものである。そのはしがきには、副題に「共生的フィールドワーク」を付した理由として、「現地の人びとと外部者である研究者・調査者の理想的な関係性がそのあたりにあるのではないかと思えたからである」と記している。苦境にある人びとを調査対象とし、話を聞かせてもらいながら、直接的な支援をするわけでもなく、研究者とは奇妙な困った存在である。

本プログラムの大きな目標である「未来共生学」の構築に対して、担当者の一人としてどれほど貢献できたかを考えると、心もとない限りである。他方で、プログラムがつくり出した場や知見、それに関わる方々からは、数限りないことを学ばせてもらった。私の教員・研究者人生にとって、さまざまな活動を同僚・履修学生と共に行えたことは、かけがえのない財産になっている。その財産が具体的に何かと問われると、その大半は目に見えない、形のないものかもしれない。星の王子さまが言うところの「たいせつなことはね、目に見えないんだよ…」である。

さて、先の「共生的フィールドワークを求めて」から時は流れ、2015年から首都ナイロビのキベラ・スラムと呼ばれる非正規市街地で新たな調査を始めた。ここは、少なくとも数十万人以上の人びとが暮らす、アフリカ最大規模のスラムである。治安は良くないことになっているが、そこには普通の市民の生活がある。制服を着た子どもたちは、丁寧に挨拶をして通り過ぎていく。予想外に礼儀正しいスラムの子どもたちに驚く。衣食は足りなくても、礼節を知っている。他の地域を歩いていても、笑顔で挨拶されることはあまりない。世間が想定することと現実は、往々にして異なるのである。

そこには政府から無認可ながら、200程度の私立学校がある。私としては、いかに外部からの支援と苦境にある人びとの努力が結びついて、学校が運営されているのかを知りたかった。ところが調査を進めていくと、NGOなどから支援を受けている学校も確かにあるが、スラムに暮らす人びとが自立的・自律的に運営している学校が大半を占めることがわかってきた。このスラムでは500 ～ 600のNGOが活動し、そこに住む貧しい人びとを支援していることになっている。ところが、再び現実はずいぶん違うのである。人びとは支援に依存するのではなく、ごく自然に自立した生活を送っている。しかしこれは、支援しようとする、支援したいと考える団体や人びとにとっては、少し困ったことである。労なく自立していては、支援する理由がないからである。

そのような私立学校のある校長と知り合いになり、調査に協力してもらうことになった。この学校は、ストリート・チルドレンなど、厳しい状況にある子どもを30人ほど集めて、2009年に校長自身が創

設した初等学校である。生徒はもちろんのこと、校長はじめ、教師全員がスラムの住人である。そのような地道な運営をしていたところ、2012年に米国のNGOが支援を始めてくれることになった。建物もよくなり、子どもの数も350人までに増えた。しかし、ここで大問題が発生する。そのNGOと校長の意見が食い違い、その校長は学校から突如追放されることになった。援助資金を注ぎ込み、学校の規模を拡大させ、最後はその組織を乗っ取るのであるから、時として援助団体とは怖いものである。被支援者と目される人びとが支援団体(の取り組み)を支援する格好になっている。

驚くべきことに、その校長は追放されてから数か月後に、新しい学校を別の場所につくり、子どもたちを教えていた。生徒数は40名、月額授業料は5ドル程度であるが、半数以上の子どもは授業料を滞納している。そうすると、毎月の収入は100ドルとなり、家賃が60ドルなので、残りは40ドルである。教師3名の給与も必要であり、とても収支のバランスが合っているとは思えない。現在の生徒数は100人に増えたものの、新しい場所に引っ越し、家賃も100ドルである。授業料を定期的に全額払える生徒は2～3割だけとのことで、このような学校がなぜ存続できるのか、不思議でならなかった。

徐々にわかってきたことは、ここがスラムであり、土地の所有権を含め、非合法であるからこそ、人びとが相互に助け合いながら生活している点である。衛生面や日常的に起こるけんかなど、問題が多いのも事実であるが、コミュニティとしての連帯意識が強いように見えた。貧困層にある人びとが、より貧しい人びとを助けているのである。例えば、授業料を払えない家庭に対して、教師が身銭を切って、食料を持って行ったりしている。定期的に給与が支払われなくても、教師を志願する若者がいる。そのような教師の一人にどのようにして生活しているのかと尋ねると、夜間に近くのホテルで掃除や食堂の手伝いをしているという。言ってみれば、教師は奉仕活動としてやっているのであり、それに対して大きな不満も感じていない様子であった。学校のもつ別の意味があることに気づいた。

そのような共生することが日常である場に、援助資金を持った「支援者」が乗り込んでくると何が起こるのか。残念ながら、外部の支援は最貧困層のもとには届きにくい。中ほどの貧困層の一部には利する場合もあるが、貧困層間の分断が起こり、格差がより拡大することもある。全員がほぼ一律に貧しかった時は平和であっても、そうでなくなると争いごとが起こる。支援者の存在は、迷惑な場合も少なくない。しなかった方がよかった国際協力は、数限りなくある。ゼロではなく、マイナスなのだから、役に立たなかったでは済まされない。

最後に、未来共生学の到達点を考えると、本プログラム創設時の思い、RESPECTに収れんされていくことを強く感じる。他者に対して誠実であり、どれほど敬意をもてるのか。支援者と被支援者、あるいは研究であれば調査者と被調査者の関係性など、共生したいと考えること自体が支援者や調査者側の片想いであり、不遜、傲慢な態度なのか。大切なことは目に見えない、では済まされないのかもしれないが、常に課題が山積しているのが未来共生学の健全な状態であるとも思う。